

『コンティジョン』

2011 年／アメリカ／スティーブン・ソダーバーグ監督作品

2 つのドクター

会員 後藤 智子 (72 期)

2001 年、私は、アメリカの自宅アパートでアカデミー賞授賞式を見ていた。主演女優賞を受賞したジュリア・ロバーツのドレス姿が目に残っている。それともう一つ忘れられないのが、この年、『エリン・ブロコビッチ』と『トラフィック』の2作品で監督賞にノミネートされ、『トラフィック』で監督賞に輝いたスティーブン・ソダーバーグ監督の快挙だ。当時、監督はまだ30代だった。二人とも、私と同世代である。

その10年後、ソダーバーグ監督の『コンティジョン』が公開された。パンデミックを扱った映画である。恐らく2010年頃に撮影されたものだろう。ところが、まるで2020年のコロナ禍をタイムマシンで見て来たかのような内容だ。

『コンティジョン』は、複数のストーリーが接点を持ちながら進んでいく。その点は『トラフィック』とよく似ている。もっとも、『トラフィック』は、アメリカの麻薬問題を知らない人でも理解するのが難しい。それに比べて、『コンティジョン』は、日本人にも分かりやすい。クレジットカード、タッチパネル、エレベーターボタン、ドアノブ、バスの手すりを感じる人の手、長い自動音声に変わった「911」というような細かな演出も、コロナ禍を体験している今なら一つとして見逃すことはない。

『エリン・ブロコビッチ』と『トラフィック』は、どちらも実在の人物・事件を取り入れた作品である。これに対して、『コンティジョン』は、実際のパンデミックを映画化したものではない。けれども、病気が蔓延していく様子は、まるでCOVID-19が人から人へ感染していく様子を見ているかのようだ。

もちろん、米国国土安全保障省（DHS）の役人がテロ攻撃だと憶測したり、WHO派遣の疫学者がワクチン目的で誘拐されたり、インターネット情報に人々が惑わされたりというようなエンターテインメントならではの側面もある。しかし、治療法もワクチンもない感染症に関わるドクターたちの仕事ぶりは、まさに本物さながらではないだろうか。そこに、この映画はスポットライトを当てている。対策のない州保健省の役人に対して、疫学専門ドクターたちは、訓練されたとおり粛々と（人によっては淡々と）目下の課題に対処していく。ケイト・ウィンスレットが演じた、米国疾病予防管理センター（CDC）派遣の感染症調査官であるEIS オフィサーは、現場で感染し、最後まで任務を続けられないことを詫言しながら命を落とす。私たちがCOVID-19に気付く前から、現場に出て懸命に仕事をしている人々がいたに違いない。

実在の人物や出来事を丹念に調べて制作された映画が絶賛されることは多い。空想の世界を最新のCG技術を駆使して制作した映画も人気がある。しかし、スリラーに分類されたフィクション映画がその後の現実によって再評価されるのは珍しい。『コンティジョン』は、2010年当時の感染症に対する専門家の知識やネット社会に生きる人間の行動を踏まえて、起こり得る近未来を描いていた。

2020年のコロナ禍と共に、『コンティジョン』は私の記憶に残っていくだろう。私は、法科大学院を卒業して、違う意味のドクターの学位を取得した。弁護士として仕事をする際、この映画のドクターたちのことを時々思い起こしてみたい。